

A Long Way from Home

まるで、親とはぐれた子供のようだった。

一帯がスタークの所有だという閑静で緑豊かな湖畔は、先だつての激しい戦いなどはじめから存在しなかったかのようにしんと沈んでいる。鳥の鳴き声と、ちいさな獣たちの足音。虫の羽音。梢の葉がこすれあう音。平穩、というものを音であらわしたらこういうふうになるだろうな、というよう音だ。

そこには、彼女以外の誰もいなかった。

「いいのか、こんなところにいて」

サム呼びかけに、すんなりとした後ろ姿がわずかに震える。

「……サム」

「ワンド」

黒いワンピースを着たワンドは、途方に暮れたような顔でサムを振り返ると、ちいさく首を横に振って「ごめんなさい」と言った。

「なにを謝ることがある？」

「私を探しにきてくれたんでしょ」

「その通りだが、別に謝られるようなことじゃない」

そう言って肩をすくめ「君で二人目だしな」と笑う。そ

のままゆっくりと歩み寄り、すこし離れたところに並んで立った。

「二人目？」

「そう。分かるだろう？」

親指で背後を指し、苦笑気味に言う。木の陰に隠れ、まるで野生の動物のように気配を消して立っているその男も、彼女と同じように群れからはぐれて森へ隠れていた。まるで、目の前の事実から逃れるように。

トニー・スタークは死んだ。そして、今日は彼に最後の別れを告げる日だ。

「……分かるわ。彼の気持ち」

ワンドが自嘲するように言った。

「だって私、どんな顔をして彼を見送ればいいのか……」

わからないの、と力なく呟いた横顔を、ただじっと見つめる。

ワンドとトニーのあいだにあるわだかまりについて、サムはただ人づてにそのあらましを聞いたただけだ。その能力をどのようにして得たのか、なぜアベンジャーズに入ったのか。そして、なぜ彼と袂を分かつことになったのか。聞き知ってはいるが、その場に居合わせたわけでも、安易にその内心へ踏み込めるほど彼女と親しいわけでもない。

サム自身も、トニーとは喧嘩別れに終わっていた。

ヒーローとしての自分の信条に従った結果ではあるが、ひとりの人間として振り返れば、後悔がまったくなくはない

言い切れない。

永遠の別れとは、得てしてそういうものなのだろう。

「……俺は、後悔したよ」

サム言葉に、ワンダがちいさく首を傾げる。

「ソコヴィア協定のこと？」

「別の、もっと昔のことさ。——逃げたんだ」

そう言って、思い出を手繰るように目を細めた。

「あいつが死んだって認めたくなくて、葬式にも出なかつた」

かつてともに空を飛んだ相棒を失ったとき、サムはその事実を事実として受け止めることから逃げた。

空中でロケット砲の直撃を受けた遺体がどうなるか。サムはそれをよく知っていたし、実際、残ったものといえどもほとんど原型をとどめていない翼の残骸と、認識票くらいのものであった。

だからかもしれない。空の棺を担ぐことになんの意味があるのだ、と思った。そう思うことで、相棒の死から逃げているという事実からも逃げた。

「いまでもたまにあいつの夢を見るよ。何事もなかったみたいと一緒に空を飛んでいることもあるし、手ひどく詰られることもある」

だから、彼に恨まれているのだ、と思ったこともある。ひとりだけ生き残り、現実と向き合うこともせず逃げ続けている自分を責めているのだと。その思いは、いまでも心

の奥でくすぶっている。

「……どうせ忘れられねえんだ。出来ることは、ちゃんとやっとしたほうがいい」

サムが相棒を思う気持ちと、ワンダがトニーに抱いている複雑な気持ちは、きつと同じ尺度で測れるものではないだろう。けれど、相手がもうこの世にいないという点では同じだった。前を向いて生きていくには、遅かれ早かれどこかで何らかの区切りをつけなければならない。

言いたいことをすべて言ってしまったから急に照れ臭くなって、そんな内心を誤魔化すように自分のつま先を睨んだ。そんなサムを、ワンダがいかにもおかしそうな顔で見

る。「——彼にも同じ話を？」

「いいや。あいつには、逃げるな、つてだけ」

ワンダ相手にさえ気恥ずかしいのだから、まして言えるはずがない。サムは首を横に振り、ワンダはますますその笑みを深くした。

「もう扱いは覚えた、つて感じね」

「含みがある言い方だな」

「まさか」

ワンダがおどけたように肩を竦める。すると、遠くで不自然な葉擦れの音が鳴った。きつと、いまの会話が彼の

——バーンズの耳にも届いたのだろうか。つくづく手負いの野生動物のような男だ。

まさか手懐けようなどとは思っていないが、それにし
つて骨が折れそうだな、と心の中でそつと苦笑をこぼした。



山羊の世話はいいのか、と聞くと、バーンズは「みんな
譲った」とさっぱりした声で言った。

遠くで離陸準備に入ったプロペラ機が風を巻き上げ、長
い髪が横顔を覆うように翻る。サムはワカンドの広大で乾
いた草原と、そのなかにぼつねんと立つ片腕の男の姿を思
い出していた。

たしかに、山羊を手放したこと自体はまっとうな判断だ
と思う。ヒーロー家業というのは、えてして不規則で不安
定な生活を強いられるものだ。とても自分以外のいきもの
の面倒を見ていられるような暮らしではない。

それからすこし迷って「家はどうした」と聞くと、バー
ンズは山羊のときとまったく同じ声で「返した」とだけ言
った。

「……あれ、借家だったのか」

「ああ」

いささか焦点のずれたサムの問いに、バーンズは相変わ
らずさっぱりとした声で答えた。

曲がりなりに人も人並みの暮らしを営んでいたはずの場所
を、まるで惜しむところのない様子で「返した」とだけ言

う。すくなくない労力と心を傾けて育てただろういきもの
を「譲った」とだけ言う。その心中を推し量ることはでき
ない。

ステイブを長く短い時間旅行へ送り出したときも、帰
ってきた彼が一回り以上ちいさくなっていたときもそうだ
った。たとえその痩せた背中に遠からぬ別れの気配があつ
ても、バーンズの声にはいつだってさっぱりと乾いた響き
があった。

バートン一家を運ぶ機影が遠ざかるにつけ、サムの懸念
は膨らむばかりだった。

トニー・スタークの短い弔いが終わり、インフイニテ
イ・ストーンの問題も片付いた。ほうぼうから集まってい
た仲間たちが、ひとり、またひとりと家路につく。帰る家
があるものはいい。家がなくとも、尽くすべき組織や使命
があるものや、ただ元の暮らしへ戻ってゆけばよいものは
いい。

この男は、きっとそのどれも持たずにここへ立っている。

「ワカンドには、もう戻らないのか」

「ああ」

「ティチャラは？」

「助けが必要になったら呼ぶと」

バーンズは纏わりつく髪を払うように頭を振り、そのま
ま首をかしげてサムの顔を見た。

「そういうお前は？」

サムは一瞬言い淀んで、あきらめたように長い溜息をついた。

「……五年、消えてたんだぞ」

明日から部屋探しかな。

そう冗談めかして続け、肩をすくめる。実際には、もっと長い間帰っていない。ソコヴィア協定をめぐる対立のはてに指名手配を受けてからは、自宅どころかアメリカへの入国すらままならなかったのだ。追跡をかわしながら転戦し、しまいには見も知らぬ土地で塵になった。

自分や多くの仲間たちを含め、あの日唐突に消えた世界の半分の人々はみなそのままの姿で戻ってきた。しかし、世界はその半分の置き去りにしたまま五年分の時を進めている。

スコット・ラングは見届けられなかった娘の五年間を惜しんだが、クリント・バートンの子供たちはみなすつかりあの日と同じ姿で戻ってきたという。

街に人々の賑わいが戻っても、行方不明者を探す張り紙や犠牲者を悼む石碑は残り、主を失った空き家の枯れた芝生が元に戻ることはない。つぎはぎのように形を変えた世界は、元通りになるでも、まったく新しく生まれ変わるでもなく、奇妙な均衡を保ちながら再び前へと進みはじめた。その前進と引き換えにして、永遠に失われたものもある。世界のなりゆきを見届けるまえに、自ら肩の荷を降ろしたものもある。それぞれの選択は尊重されたが、残されたも

のはまだ到底すべてを受け止めきれずに、こうして呆然と空を見上げている。

帰るべきところがないのは、サムも同じだった。ステイプから受け継いだ盾だけがある。たったひとつの荷物。なのに、なにより重い。

「なあ」

部屋探し、付き合ってくれよ。

ついそんなことを言った。ついうっかりと、そんなことを言ってしまった。バーンズが驚いたように目を見開き、サムは精一杯眉をしかめて不本意だという表情をつくった。

「……俺でよければ」

「……よくなきや、言わない」

だよな、とバーンズが笑う。そのかすれた笑い声にはわずかながら確かに体温があり、サムは自分の選択が正しかったことを知った。それがたとえ、ついうっかりとつた選択だったとしても。

それでいいんだ、と思うことにして、サムも同じようにかすれた声で笑った。